

国際化時代の英語音声 PEDAGOGY 考察

大 森 裕 實

A Study on Pedagogy of English Pronunciation in the Era of Internationalisation

Yujitsu OHMORI

The aim of the present paper is to explain the complicated matter of today's views of English as an international/global language, or as a lingua franca, so as to present a reliable approach to English pronunciation for L2/FL learners. Unlike written English, which is believed to vary little among varieties of English such as British, American, Canadian, and Australian Englishes, the spoken form has a variety of accents because of its flexibility and the fragility of its norms. Judging from statistics of the number of English speakers and their identity concerns, many non-native speakers may see neither RP (Received Pronunciation) nor GA (General American) as worth mastering, although these are the archetypal pronunciation standards that L2/FL learners of English have been expected to learn. This fact would tend to lead many non-native speakers of English, or any speakers at all for that matter, to a lack of confidence in teaching/learning English pronunciation in class. To encourage them to continue teaching/learning the language, this paper proposes some factors to which learners of EIL/EGL should pay attention, that is, intelligibility, acceptability, and appropriateness in the context of culture. Although these concepts derive from Jenkins (2000) and, to a lesser extent, from Crystal (2003²), it may well be said that International Standard Spoken English, or English as a Lingua Franca, has not yet become a reality. Instead, this paper suggests to non-native speakers of English that they should teach and learn the revised version of RP or GA, which will give them a high

probability of coming close to an educated English pronunciation that will be intelligible and acceptable to as many people in the world as possible.

序

英語の意識的学習 (English teaching & learning) に従事する者は、20世紀末葉から現在においては、その拠り所となる決定的指針を喪失した状況下に身を置いていると表現しても過言ではない。特に、音声面に関してはその兆候が著しいことは衆目の一致するところであろう。パーマー (Harold E. Palmer) の提唱する Oral Method 全盛期には、英国の容認発音 (Received Pronunciation) が第一の手本とされ、フリーズ (Charles C. Fries) やラドー (Robert Lado) の提唱する Oral Approach 全盛期には、アメリカ合衆国の一般米語 (General American) が雛型と見なされてきた。とりわけ後者の場合、太平洋戦争後のガリオア資金 (後のフルブライト奨学資金に継承) により米国留学の機会を得た群の中には、ミシガン大学で研修し、その手法を日本の英語教育に還元した者が多かったということが密接に関係する。それは、戦後の「英語」検定教科書にも色濃く反映し、*Jack and Betty* を典型例として¹⁾、*New Prince* や *New Horizon* にしても、ごく最近まで、米国人の少年少女の会話を通して、米国文化の紹介を行なう趣向で編まれたものであったことが、この間の事情を雄弁に語っている。そうした教材に附属する会話テープや CD は、当然の帰結とはいえ、いわゆる米国式英語発音に拠った。

その趣の流れに沿った教育行政の結実というわけでもないだろうが、中学校学習指導要領 (平成10年12月告示、平成15年一部改正) 第9節「外国語」において言及される言語材料では「現代の標準的な発音」が指定されている。高等学校学習指導要領 (平成11年3月告示、平成15年一部改正) 第8節「外国語」でも同様に、「原則として現代の標準的な英語による」との記述が看取される²⁾。いずれの場合も、“現代の標準的な発音”を言語材料とする学習指導が謳われているが、それはむしろ逆説的に、“現代の標準的な発音”なるものの実体が何であるかについて明確に定義することが難しい状況に直面していることを痛感させる言表であるともいえる。

このような時代に、本稿筆者は本務校をはじめとするいくつかの大学で

「英語音声学 (English Phonetics)」を担当し、日本人大学生相手に English Pronunciation の理論と実践を教授してきた。この経験に加えて、某大学から依頼され、当該大学が学術交流協定を結ぶ英国のW大学と共催で実施する TESL コースにおいて、英国人学生 (native speakers of English) 対象に English Phonetics を12週間教授するという体験も経て、さらには、ロンドン大学における調音音声学の第一人者 Michael Ashby 氏 (Senior Lecturer in Phonetics にして、日本人と馴染みの深い A. S. Hornby 系の *Oxford Advanced Learner's Dictionary* 第5-8版の phonetics editor も務め、毎年同大学で Summer Course in Phonetics を開催) と Workshop in English Phonetics 2011 において親しく意見交換する機会にも恵まれた。これらを契機として、この段階で一度、国際化時代における英語の位置づけと、そうした英語の音声を学習する際の問題点を整理し、現代の英語音声 pedagogy 確立に向けての展望を見出だそうとする試みが本稿の趣旨である。

国際化時代の英語

英語という言葉について、今や英国語 (British English) や米国語 (American English) の観点からだけでは十分にとらえることができない国際共通語 (lingua franca) であることを一般の英語関係者に知らしめた書籍は Penguin Books (初版は Pelican Books) の一冊として上梓されたクリスタル (David Crystal, 1988) *The English Language* [『英語——きのう・今日・あす』豊田昌倫訳, 1989] ではなかったかと思う。その後に出版されたブライソン (Bill Bryson, 1990) *The Mother Tongue*, Penguin Books [『英語のすべて』小川繁司訳, 1993] や Crystal (1997/2003²) *English as a Global Language*, Cambridge U. P. [『地球語としての英語』國弘正雄訳, 1999] の記述を目の辺りにして、各書の版が改訂されるごとにその統計数字が刷新されて、世界における英語話者数が増加の一途を辿っていることを知ってもさほど驚かなくなった。

Crystal (1988) では、“母語”以外の存在としての“第二言語としての英語”(ESL)と“外国語としての英語”(EFL)の位置づけと実態が見事に描き出されていたが、そこには“国際語としての英語”(EIL)という

術語は看取できなかった³⁾。我が国における“国際英語”という新造語は、文化人類学者にして国際舞台で活躍した同時通訳者の國弘正雄に因るところが大きいと思われるが、残念なことに、“国際英語”という語句は最新の『広辞苑』第6版(岩波書店, 2008)にも未だ採録されてはいない。Crystal (1997) は一歩進んで Global Language と命名し (EGL)、國弘もその趣旨に賛意を示す⁴⁾。また、鈴木孝夫は、日本人にとって“目的言語”から“手段言語”を経て、そのような存在に至った英語を“交流言語”と呼ぶ⁵⁾ [「日本は21世紀の世界に向けて何を発信するか」『英語が第二の国語になるってホント!?!』國弘正雄編著, 2000]。さらに、カチル (Braj Kachru) の提唱する“世界諸英語”(World Englishes: WE) はスミス (Larry Smith) の活動と併せて相乗効果を惹起し、今や市民権を獲得しつつある⁶⁾。

ここで、日本人と英語との接触について言及しておくとするれば、かつての短波ラジオで FEN や VOA を雑音のなかで聞くのが精一杯だった環境からは脱却し⁷⁾、現在は BBC World や CNN をリアルタイムで視聴でき、インターネットではあらゆる情報が生の英語を通して入手できる状況にある⁸⁾。欧米の大学への留学要件として課せられる TOEFL や日本企業で注視される TOEIC といった英語能力試験で使用される英語も Received Pronunciation (RP) や General American (GA) のような、英米のいわゆる“標準発音”だけではなくなくなったことが、当世の英語事情を如実に表わしている。

さて翻って、国際化時代におけるこのような英語の特徴と位置づけという観点に立脚して考えてみると、学習者の英語習得に際して“目標となるような何らかの発音モデル”の必要性の有無が問題となり、これが本稿冒頭に提起した学習指導要領に看取される“現代の標準的な発音”の問題と直截的に関連する。上掲の Kachru は WE を 3 種類 (L1: Inner Circle; L2: Outer Circle; L3: Expanding Circle) に分類し、L1 と L2 には優位差はないと主張する。L1 には、USA / UK / Canada / Australia / New Zealand が含まれ、話者数は約 3 億 2,000 万から 3 億 8,000 万人、L2 には、Singapore / India / Malaysia / Philippines / Bangladesh / Ghana / Kenya / Nigeria / Sri Lanka / Pakistan 等 50 ヶ国が含まれ、話者数は約 3 億から 5 億人を数える。また、L3 には、China / Japan / Greece / Poland / Egypt / Saudi Arabia / Israel / Nepal / Zimbabwe / Russia 等多

くの国々が含まれ、話者数は約5億から10億人である（統計の取り方次第で数字のばらつきが生じることに加えて、漸次的に数字が増加する）[Crystal 2003²: 61]。学習者がL1やL2（ESL）として英語を習得する環境（KachruのInner CircleとOuter Circle）にある場合には、その必然性から、人々を取り巻く社会で使用される発音型がモデルとなることは想像に難くない。他方、L3（EFL）として習得される場合（Expanding Circle）というのは、その動機が社会的必然にあるのではなく、個々人の事情（勉学・仕事・家族・ボランティア活動等）によって異なり、それはいわゆる「学習」と同義とってよい。それでは、EFL環境にある教室における「学習」には、どのような発音型がモデルとして必要とされるのか⁹⁾、換言すれば、いかなる基準を満たせば国際化時代のEIL/EGLの習得として認定されるのか、さらには、その実現のための効果的教授法は果たして存在するのだろうか。これら惹起する問題に対して果敢な取り組みも始まっているが、それについては本稿後段で詳述する。

国際共通語としての〈実在の英語〉と〈架空の英語〉

英語には、他の言語と比較対照した場合に、言語的に本質的優位性はないと言ってもよい。確かに、言語接触を繰り返した結果、語彙の豊富さという利点——つまり表現能力の豊かさに繋がる長所は認めることができるが、発音、発音と綴りの乖離、文法の観点からは、決して他の言語使用者に容易に広まる種類の言語ではない。そうであるならば、英語を20-21世紀の国際共通語（*lingua franca*）に押し上げた要因が「言語外的要因」、すなわち、英米両国の政治力と経済力にあることは言を俟たない。ラテン語を思い浮かべれば明らかだが、ある言語が共通言語になれるかどうかはL1としての言語話者数の問題ではない。この場合、もう少し具体的な側面から述べるならば、政治・経済・報道・広告・放送・映画・音楽・観光・研究・教育等の媒介言語として英語が必要とされているという事実が重要なのである。

ところで、過去においても、国際補助言語（International Auxiliary Language）、略して国際語あるいはUniversal Languageを求める運動はあった。例えば、ポーランドのザメンホフ（L. L. Zamenhof）が考案したエスペラント（Esperanto）やフランスのド・ポーフオール（L.

Couturat de Beaufort) がそれを改良したイードー (Ido)、さらにはデンマークの言語学の泰斗イエスペルセン (Otto Jespersen) が考案したノーヴィアル (Novial) 等があるが、いずれも人工言語であるため、エスペラントといえども世界規模では十分に定着しえない憾みがあった。

本稿で問題にしている英語は、印欧語族に属し、系譜の知られた自然言語であり、その多様な変種が世界各地に現存している。而して、そのように〈実在する英語〉を総称して WE (World Englishes) と呼び、それは English as an International Language (EIL) あるいは English as an International Auxiliary Language (EIAL) を求めてきたハワイ大学のスミス (Larry Smith) の考え方も合致したということになる。

ところが、WE と EGL (English as a Global Language) “世界語としての英語” とは一瞥するとよく似た概念のように思われるが、実は異なるものであることを認識しておかねばならない。すなわち、WE が世界に現実に存在する英語群を意味する一方で、EGL は現在のところ実在しない〈架空のリンガフランカ〉を意味しているからである。EGL の名付け親 Crystal は、自身の英語習得の経験に基づき¹⁰⁾、International Standard Spoken English “国際標準口語英語” を標榜する一人であり、“International Standard Spoken English is not a global reality yet, but it is getting nearer” [Crystal 2004: 39] と言明する。

ここで留意したいことは、書き言葉としての英語の共通語化は一般的傾向として認められるという点である。例えば、Br.E と Am.E の間に発音と綴りの些細な差異や単語の意味や慣用表現のいくらかの差異が存在するにしても、それは意思疎通上の障害になる程度に大きなものではない。事実、英米語の差異を強調する言辭は様々にあったが、現在の視点から振り返ると、それは必ずしも正鵠を射たものとは言えない。米国の言語研究ジャーナリストであったメンケン (Henry L. Mencken) は、かつて *The American Language* (1919) で「イギリス英語とアメリカ英語は異なる二つの道を辿る別々の言語であり、アメリカ英語は将来イギリス英語から独立した一言語になるであろう」と記述を残したが、同書改訂第4版 (1936) においては「アメリカ英語のイギリス英語への影響は顕著であるので、イギリス英語がアメリカ英語の一方言に化すだろう」と修正した。それより以前に、英国の英語学者スウェート (Henry Sweet) は「一世紀も経てば、英国と米国と豪州は相互に理解不可能な異なる複数の言語を話すことにな

る——その理由は、発音の変化がそれぞれに異なっていることに起因する」(1877)と指摘し、さらに遡れば、国威発揚を意図してアメリカ英語の辞書を編纂したウェブスター (Noah Webster) もまた同様の点を強調して、「イギリスの英語とは異なる北アメリカ語の誕生」を予見したが、それはあたかも「ドイツ語あるいは〔ゲルマン諸語〕相互から、オランダ語、デンマーク語、スウェーデン語が誕生した経緯に似た“必然的で不可避の発達”である」(1789)と説述している。合衆国第二代大統領アダムズ (John Adams) が18世紀末に「英語は来世紀もその後もずっと世界で最も一般的な言語になる運命にある——それは過去においてラテン語が、また現在フランス語がそうであるのと同様にである」と表現したことは示唆的である¹¹⁾。結局、現状に鑑み、最も適切に表現するとすれば、英語の発音と綴りの乖離問題に関心の深かったノーベル文学賞作家ショー (George B. Shaw) が揶揄するように¹²⁾、「英米両国は共通言語によって分たれている」“divided by a common language”という至言に尽きるのではないか [Crystal 2003²: 142]。

他方、話し言葉としての英語の共通語化は、書き言葉に比べるといっそう複雑で、Crystal が指摘するように可能性は低くはないにしても、蓋然性が高いかどうかは議論の焦点となる。英語の行く末を予見するためには、過去の世界語であったラテン語を参照し、そこに英語との類似性と相異性を再検討することが有益であろう。ラテン語も英語もともに誕生から600年の歳月を経て、転換期を迎えた。ラテン語の場合には分裂の始まりであり、英語の場合には拡張の始まりである。古典ラテン語の変異形である俗ラテン語 (日常口語体) がやがて地域方言に分裂して、現在のロマンス諸語——フランス語、スペイン語、ポルトガル語、イタリア語、ルーマニア語——が成立したことを考慮すると、英語にも分裂の可能性がないとは言えず、それはWEの存在意義とも関連する。実際、英語には「遠心力」も「求心力」も働く。地域それぞれの置かれている状況とアイデンティティーの必要性を反映すれば、「多様化」を強化することになり、他方、相互理解度を求めれば、「標準化」を強化することになる。いずれにしても、国内においても国外においても相互理解度の必要性は高く、今までも共通言語 (lingua franca) は求められてきたのである。それに応じて、Br.E と Am.E の差異は小さくなり、国際的に標準化された口語英語の出現可能性が大きくなってきている。言語を通して、みずからのアイデンティ

ティーを表現すると同時に、言語を通して、コミュニケーションする能力を得たいとする思い、すなわち「遠心力」と「求心力」とが同時に必要とされる時代に我々は生存している [Crystal 2004: 36-7; 大森 2005: 72] という側面を看過して Spoken English の国際標準化を議論することはできない。

さて、本節の締め括りに、〈实在〉〈架空〉というキーワードに収斂して附言しておきたい。ここでは巨視的視点から、国際共通語としての英語は实在か架空の存在かということについて述べたが、翻って、微視的視点から、英語のモデル発音と評される容認発音 (RP) についても、实在のものか架空のものかという議論はあって然るべしということである¹³⁾。話者数だけを考慮して、イングランドの3%から5%程度の人口にしか話されていない少数派であると推定するなら [Hughes et al. 2005⁵: 3]、Br.E の標準発音型として外国人学習者に提示される RP もまた、標準発音の架空の存在種ではないかと疑うことは、あながち標的外れではない。果たして、そのような変種に国際共通語としての役割を担わせることに無理はないのか。もし仮に無理があるとすれば、それに取って代わる標準発音型には何が相応しく、また、どのような特徴を備えていれば適当ということになるのであろうか。

EGL から考える現代の標準的な発音

本稿序節において、本稿筆者が最近経験した英語音声教授に関する個人的体験を記したが、それらを通して、モデル発音の妥当性について観察したことをここで改めて確認して、現代の標準的発音とは何かについて考察を進めたい。

・日本人学生に対する「英語音声学」の場合

(1) 日本の中高等教育における音声指導の現実に鑑みて、GA を意識して実施。ただし、時に応じて、RP を採用。従って、杉森幹彦ほか共著 *Spoken English: Theory and Practice* (1997) を基本テキストとし、RP も音源としてもつ島岡丘著 *Mastering the Sounds of English* (rev. 1990) を適宜参照する。特に、[r] については、GA の特徴的 rhotic (例えば car, cart) は義務的採用とはせず、RP の特徴的 non-rhotic も推奨し、学習者

の調音負担を軽減している。

(2) 日本人学習者が英語らしさを求めた場合にしばしば障壁となる英語音の特徴を集中的に学習——Consonant Image の獲得、多様な Vowel Phoneme / ア / の識別、Consonant Clusters の習得、Syllables & Stressed Rhythm & Isochronism の理解と習得、Connected Speech (linking / assimilation / elision) の理解と習得、Intonation の類型と習得等が中心課題となる。

[観察] ——英語習得を目標に定める英米学科学学生を対象とする専門科目としての英語音声学であるため、世界に広がる英語変種について理解は深めながらも、GA や RP を音声モデルとして英語学習を行なうことに大きな違和感は学習者サイドに看取できない。ただし、帰国学生が混在する場合には、たとえ当該学生が英国や米国からの帰国学生だとしても、単純に GA や RP を音声モデルとして音声指導することには、次項の場合に近似して、かなりの困難を伴う。

・英国人学生に対する English Phonetics の場合

(1) 海外で行なう TEFL コースに参加した（移民系ではない）Saxon 系の 4 名 [内訳：J (male, fr. Liverpool)、T (male, fr. Southern England)、R (female, fr. Kent)、A (female, fr. Southern England)] の学生に対する音声指導は、学生の L1 に配慮して、RP を中心に実施。従って、テキストは Reading 大学名誉教授 Peter Roach による定番 *English Phonetics and Phonology* 第 4 版（2009）と著者吹込みの CD を使用した。ただし、当該コース修了後に ESL/EFL を英国人以外に教えることを考慮して、“students are supposed to have a comparative point of view on speech sounds, paying attention to difficulties for non-native speakers to master English pronunciation” という留意点をシラバスに盛り込んだ。

(2) 授業の構成は極めてオーソドックスな内容で、Introduction として IPA (International Phonetic Alphabet) と English Phonetic Organs に A variety of Accents in Britain を加えたものを初回とし、第 2 回から順次、Segmental phoneme : Consonants の特徴、Vowels の特徴、Diphthongs & Triphthongs の特徴 (Great Vowel Shift と Spelling Chaos を含む)、Suprasegmental phoneme : Strong & Weak syllables and Consonant clusters の特徴、Stress in simple/complex words & Word formation の

特徴、Weak forms & Stress-timed rhythm, Isochronism の特徴、Basic pitch & intonation patterns の特徴を講じ、調音と聴覚の練習を伴うものであった。

[観察] ——①学生としては RP を学習すべきであるとの意識はあるが、L1としての自身の accent をどの程度まで矯正すべきと考えるかについては温度差がある。将来計画が具体的で TESL コースを履修している場合には、当然のことながら、熱心に accent を修正する傾向にある。特に、男子学生 J の場合には（出身地に起因するのかもしれないが）、授業で強く指導されれば、意識的に多少芝居じみた態度で RP モデルに近づけることは可能だが、通常は RP 発音を真似ることに嫌悪感が看取された。②たとえば英国人の音声学 Peter Roach が吹き込んだ RP モデル CD 音声であっても、女子学生 A のように（自身の英語発音に不備を感じていないため）、「私はそうは言わない」という評言と非修正姿勢が看取された。③当該授業の評価の一部として Speech Production in GB (RP)/ GA という音声ファイルの課題提出を求めたが、そこには新種の河口域英語 (Estuary English) の典型的特徴である声門化 (glottalisation) の傾向は認められなかった。しかし、抑揚の点で、若年層が多用する upspeak/uptalk が認められた¹⁴⁾。

・ Michael Ashby による Workshop in English Phonetics の場合

(1) 前述したように、ワークショップ講師の Ashby 氏は OALD 第5版-第8版の phonetics editor も務め、ロンドン大学で長年にわたり調音音声学を中心とした Summer Course in Phonetics を開催する音声指導の第一人者である。Ramsaran (ed.) (1990) には Patricia Ashby と共に著わした “Generalisations on RP consonant clusters” (pp. 168-177) という実践的論文が所収されている。当然のことながら、氏の音声指導は、意識的にせよ無意識的にせよ、RP を中心に設定したものになる。

(2) ワークショップの内容は、Naming vowels / Finding words / Listening to quality, not length / Making vowels shorter / Coarticulation CCV & CCCV / Rhythm / Stress timing / De-accenting old information / Final and non-final tones の説明と実践練習であったが、特に、日本人学習者が実践練習において、必ずしも意識的に行なっていない「情報構造に留意した speech production (強勢の置き方と音調の型)」についての内容

が新奇の feature であったと言える。また、RP といえども常に変化しているとの指摘——調音位置の変化の大きな母音 [a] と [u:] を基本母音図表に示して——は示唆的であった。後母音 [u:] の非円唇化と舌位置の前寄せ移動は若年層には一般的な傾向で、これは **goose fronting** と呼ばれる現象である。また、多くの外国人学習者が *My Fair Lady* のような芝居や映画で抱くロンドンの典型的 **Cockney** は今日ではほとんど聞かれないが、別の変種 **Estuary English** が擡頭してきているとの指摘もあった¹⁵⁾。参加者からの「どの英語発音が最も難しいものだと思うか」という質問に対して、「th の発音だ」という回答は、英語の子音 th [θ / ð] が他の言語と比較対照してみても、極めて異質な音であることを証左したことになる。

[観察] ——① Ashby 氏の英語音に対するイメージは、その恒常的变化を認めつつも、氏の経験から伝統的 RP に設定されていることは疑う余地がない。② 若年層が多用する **upspeak/uptalk** については、**formal occasion** で使用することは少ないのではないかと、また、使用したとすれば、教養度が疑われるので避ける方が賢明であるとの見解。③ 「TESOL の context において、米国構造主義言語学者ホケット (Charles Hockett) が発音モデルにするという **educated people's speech** とはどのようなものと定義できるか」という質問に対して、明確な回答はなかった。ただし、話し言葉英語において、国際英語 (EIL/EGL) というような別変種が生じる可能性は低いとの見解を示した。

さて、現在の日本における英語教育環境下では、大半の英語教員は英語母語話者ではないが、中等教育 (中学・高校) の場合であれば、**Native Speaker** である ALT と授業を構築しなければならないし、高等教育機関 (高等専門学校・短大・大学) においても、**Native Speaker** と協力してカリキュラムを運営する必要がある。しかし、それにもかかわらず、自身の英語発音に自信をもっている **Japanese Teacher of English** は極めて少ない。常に自分の発音が GA や RP に適っているだろうか、自分が組むパートナーの **Native Speaker** の発音と比較されて、学生から不当な評価を受けないだろうかといった、本質的ではないものの重大な心理的問題に日々直面しているのである。

それにもかかわらず、新しいコミュニケーションの媒体であるインターネットの発達と普及により、学生が **authentic source** に接する機会も格

段が増えてきている。改めて教室で講義を受けるまでもなく、英米語に限らず、カナダ英語、オーストラリア英語、アイルランド英語、インド英語、シンガポール英語といった英語変種の実態をみずから耳目にして、英語の多様性に対する学生の理解は深まってきている——ただし、それは決して学問的レベルの理解ではなく、教室で学習する英米語とは異なる種類の英語も普通に意思伝達的手段として使用されているのだとの「気づき」程度のものに過ぎないのだが、極めて重要な洞察であると言える。また同時に、インターネットの普及による E-mail の繁用は、話し言葉のようでもなければ (not like speech)、書き言葉のようでもない (not like writing) 言語媒体 Netspeak の出現を可能ならしめた¹⁶⁾。

ここで繰り返して強調するが、WE は現実には世界に存在する英語群だが、EGL/EIL は現在は実在していない架空の共通語 (lingua franca) を意味している。上掲の学生による「気づき」は WE に対するものであって、EGL/EIL に対する認識ではない。学習指導要領が謳う“現代の標準的な発音”とは WE 中の (現段階における) 優勢変種と定義してよいのか、それとも、Crystal が言及するような共通語としての EGL/EIL の存在を意図したものとして理解すべきなのだろうか。田辺 (2003: 158-170) は、(a) EGL とは教師にとってどのような意味をもつのか、(b) EGL とは教師が日々教える英語とはどこが異なるのか、(c) EGL は教師にとって良い英語なのか、という疑問を投げかけ、EGL を理解するために次の対照型キーワードで括って、その特徴を際立たせる—— Global vs. Local / International vs. National (Identified) / Open vs. Closed / External (International) vs. Internal (Intranational) / General (Universal) vs. Specific (Professional) (Academic) / Holistic vs. Analytic / Common vs. Special / Practical vs. Sophisticated (Artistic) / [Uneducated] vs. Educated (いずれの項目も前者が EGL の特性)。さらに、EGL が確立するため、すなわち、架空の EGL から実在の EGL への3つの条件を提示する——①国際性のある英語であること、②自立性の強いピジンではないこと、③教養ある英語 (educated English)であること。ここでもまた、educated people's speech というキーワードが中核的概念となっていることに留意しておくことは重要であり、その現代的定義を慎重に検討し、この趣の問題を扱う研究者間に共通理解を確立しておくことが焦眉の急である¹⁷⁾。

結論的に述べれば、田辺 (2003: 305) が示す、EGL の視点を踏まえた 5 つの留意事項が“現代の標準的な発音”を考究する際の一つの道標として認識されてよいのではないか——① intelligibility ; ② acceptability ; ③ appropriateness in the context of culture ; ④ accurate pronunciation of consonants ; ⑤ consistent pronunciation of vowels。

Jenkins の考究する English as a Lingua Franca

国際共通語 (lingua franca) としての英語を考究する現代の leading scholars の代表格はジェンキンス (Jennifer Jenkins 英国 Southampton 大学教授) に他ならない。*The Phonology of English as an International Language* を世に問うた 2000 年当時、ロンドン大学の King's College に附置された English Language Centre の英語教員養成課程の中心にあった女史にとっても、世界における英語 L2 学習者が 13 億 5,000 万人も存在する (それとは対照的に L1 は 3 億 3,700 万人に過ぎない) 実態——すなわち、英語史上初めて L2 話者数が L1 話者数を凌駕する時代に突入したことは、決して看過できる事態ではなく、むしろその現実を受容して、従来の教育方法から発想を転換した 21 世紀の新しい教授法を模索しなければならなかったことが、同書執筆の動機ではなかったかと推測される。従って、同書の目的は「国際的な視野に立って英語の音声を考究する」ということに尽きるが、その目的達成のために 2 つの段階が設定されている。第一段階としては、EIL 話者がどのような音声的行動をとるのかについて、共通言語として英語が使用される context の言語データから、それを記述・分析することであり、さらに、第二段階に進んでは、EIL の使用を助長するために、共通言語としての英語使用者間における音声の相互的“判読可能性” (intelligibility) と“容認可能性” (acceptability) について再考することである。後段の点は、応用言語学的観点から、EIL 時代における英語発音指導に新しく特定の目標設定を求めることの是非をめぐった議論が活発に行なわれることを推奨し、また、可能な範囲において、その処方箋を施すこととして認識される。以下、同書を構成する全 8 章の要点を簡略に紹介する形で、Jenkins の考える EIL モデルを明らかにしたい¹⁸⁾。

Jenkins (2000) 第 1 章では、“英語”の担い手 (所有者) に変化が生じ、EIL 話者数が増加したことが、その趣の英語発音の“判読可能性”に関わ

る大きな問題であることを指摘する。特に、従来学習モデルとされてきた英国語 RP (容認発音) は次の3つの理由から L2 学習には適当ではないと主張する——第一に、そもそも現実の話者数が非常に少ない (Crystal に拠れば英国人口の 3% にも満たない) 架空に近い発音モデルであり、実際には教養ある英国語話者は RP と自分の地域の発音を混成した“修正 RP”を発達させていること；第二には、L2 学習者に獲得させるには、発信の点においても、受信の点においても、RP は決して最も容易な発音モデルではないこと；第三に、RP 自体が時間の経過とともに変化してきているため、高年齢層の RP と若年齢層の RP との間に齟齬が生じており¹⁹⁾、時代遅れの RP を学習する危険性があること。つまり、マコーレー (Ronald Macaulay) 曰く、現代の音声学者・言語学者は、「英語人口の大多数の発音よりも、ほんの一部のエリート層のアクセントに関心や興味を抱くこと——換言すれば、RP の呪縛から脱却すべき時期ではないか」という言辞に焦眉の問題意識が収斂される。

第 2 章では、“言語変異／言語変種” (language variation/variety) に対する否定的な見解について考察し、すなわち、それはいわゆる“標準英語”の使用者には言語の保守主義と統一性を好む傾向があることを示唆するものである。そこに引用された日本人学生の事例は興味深い。あるプレゼンテーションの結びに“Don't rise (i.e. raise) the fees of school (i.e. school fees)”と言ったのだが、(日本人の英語発音に慣れているはずの) Jenkins の耳にさえ“Don lies a fizz off score”としか聞こえなかった——最終的には 4 回繰り返してようやく解かったにもかかわらず、同席した一人の日本人学生は即座に理解し、他の学生達も 2 回聞けば解かったのである。この場合の“判読可能性”は、native-likeness を犠牲にすれば可能になるということであろうか。また、ヴァリエーションという概念はそれほど単純なものではなく、異なる L1 話者間においても、特に音声面において顕著に存在する事実を示すが²⁰⁾、Jenkins はこれを“inter-speaker variation”と呼ぶ。続く第 3 章では、第 2 章で提起されたヴァリエーションの問題について、個々の L1 話者内部においても、個々人が置かれた社会言語学的コンテキストや社会心理学的必要性に基づいてそれが生じることを示し、こちらは“intra-speaker variation”として、位相的に区別する。

第 4 章からは視点を L2 話者に転じて²¹⁾、EIL での円滑なコミュニケーションを促進するために相応しい中核的発音特性を設定する際の基礎とな

る“判読可能性”という概念について検討を加える。“判読可能性”の問題は、従来から実際の言語資料に基づかずに憶測や思い込みによって語られることの多かった論題だが、そこに現実の言語データの観察に即した分析を持ち込んで説得力を強化した自論を展開した第4章は、同書の核心部分として位置づけられるであろう。Jenkins は、L2としての英語学習の過程にある nonnative speaker 間の“interlanguage talk” (ILT) によってコミュニケーションが成立しなかった40の談話事例（この場合、異なるL1をもつ2人1組による談話）をコーパスとして利用し、5つの範疇変数 [① pronunciation, ② lexis, ③ grammar, ④ world knowledge, ⑤ ambiguous/miscellaneous cause] に従って分類して、その分析を試みる。

それを受けた第5章においては、EILの中核的発音を決定する際に“言語転移”が果たす役割についての考察へと進む。一般に、母語L1と達成目標言語L2の間の音韻体系に共通要素が多ければ、“言語転移”は学習に有利に機能すると考えられるが、日本人学習者の英語習得の場合に /r/ と /l/ の識別は困難を与える“負の転移”として働く。一方、フランス語における /y/ と /u/ の識別は、英語L1話者にとっては細心の注意を要する音素であろう。その趣の学習過程において生じる“中間言語会話” (ILT) の“判読可能性”とは何かを考究する必要性に迫られていることを説く。

第6章と第7章では、EILとしての英語の教授方法の優先事項〈その1〉として、相応しい中核的発音特性を設定すること、また、優先事項〈その2〉として、EILの授業においてどの程度までそれが“判読可能性”のあるものとして妥協するか、すなわち、“容認可能性”の問題に対して、“調停理論” (accommodation theory) を適用し、その解決策が考究される。特に、“共通言語中核” (Lingua Franca Core: LFC) を特徴づける3つの特性として、sounds (個別音) / nuclear stress (核強勢) / articulatory setting (調音の構え) が指摘されていることは注目に値する。Supra-segmental phoneme (超分節音素) に分類される rhythm / stress / pitch / intonation が native-likeness に近づく英語らしさとして一般的に強調される傾向が認められるが、例えば、強勢リズム (stress-timed rhythm) という特徴は、核強勢を受ける音節が長くなるという特徴に比べればLFCにとっては重要なことではないとする Jenkins は、そのデータ分析に基づき、nonnative speaker 間の英語による意思伝達のコンテキストにおいては、Segmental phoneme (分節音素) に分類される個々の母音・

子音の誤りのほうが、リズムやストレスといった超分節音素の誤りよりもはるかに深刻であることを強調する²²⁾。また、EILのもつ“容認可能性”については、“判読可能性”さえあれば、L2話者のほうがL1話者よりも互いの発音について寛容であることを、James, C. (1998) *Errors in Language Learning and Use* (Longman) に依拠して、「L1話者は音韻>形態>統語>意味の順序で強い権威意識をもっているため、そこからの逸脱形については、その順で厳しい態度をとる」ことを理由として明示する。

第8章は、EILの音韻研究とその成果の教授方法への応用——適切な音声教育と教員の意識改革こそ、理論家にとっても実践家にとっても急務であり、今日の世界的規模の多言語社会を迎えて変貌した英語の役割に無関係となった発音、例えば、RPについて記述したり教授する方法を促進することはもう打ち止めにする時期に至っていることを主張するものであると要約できる。

ここで、Jenkins (2000) で展開された中心的概念ともいえるべき“判読可能性”という術語について理解を深めておきたい。言語関連の脈絡での“判読可能性”を表わす *intelligible* の出現は、例えば、“Swift was concerned that the language would be so corrupted that in a few years English usage, replaced by another set of vogue words and phrases, would become unintelligible” [McCrum et al. 1987: 132] の事例に看取できる。他にも、研究社『新英和大辞典〈第6版〉』では *intelligible pronunciation* に「明瞭な発音」の訳語を与えているが、これでは“判読可能性”のもつ内包的意味が伝わりにくい。同書第4章には、応用言語学の分野の研究者間に広く浸透していると思われる、国際語となった英語の“判読可能性”に対する従来からの概念が Bamgbose, A. (1998) *Torn between the Norms: Innovations in World Englishes*, *World Englishes* 17/1. から引用する形で紹介されている。それは、「何が *intelligible* で何が *intelligible* でないかを決定する特権をもつ *native speaker* に解かしてもらおう努力を *nonnative speaker* 側が専一に行なうという一方的な過程を意味する」というもので、英米の一般人にも、また、多くの英語教員にも受け入れられてきた概念である。換言すれば、L2話者による *native-likeness* の追求と達成こそが“判読可能性”を満たすものと考えられてきたということであろう。しかし、その定義づけには、現在の EIL の脈絡において *nonnative listener* が普通に存在すること、また、*nonnative speaker* 同士の意思伝

達も普通に行なわれるという視点が欠落していると批判することは正鵠を射たものと評価できる。確かに、英語の「国際化」(internationalism) という概念は“判読可能性”(intelligibility)をもつということを意味している。すなわち、文法・語彙・綴り・発音・慣用語法等の面で、英米語いずれかの標準(RPやGA)に偏らない“合意された基準”(agreed standard)が必要とされるということを含意するのである。

このような観点から Jenkins 女史の主張を改めて問い直すと、今日の英語のおかれた lingua franca としての言語環境を十分に考慮したうえで、人口数で少数派の L1 話者側に多数派の L2 話者が習得すべき発音モデルや規範を決定する特権など存在しないのだから、従来、金科玉条のごとくに信奉してきた RP や GA から脱却した LFC を確立して、それを教授していくべきであるとする姿勢には一定の評価が与えられて然るべきであろう。しかし、進取の気性に富んだ革新的な他の主張が往々にして示す傾向と同様に、理念が先行して、一般的に十分な納得が得られないのではないかという印象が存在することは指摘しておかねばならない。例えば、L2 話者の目標言語である英語習得の究極の目的は何か。鈴木孝夫のいう“交流言語”の習得に他ならないと断定できるだろうか。確かにその側面は無視できないし、本名信行は「今日ビジネス界で日本人が交渉相手にするのは中国人であり、そこで使用される言語は伝達能力をもったアジアの英語である」と JACET 中部支部第27回大会特別講演「多文化共生時代の英語教育」(2010)で指摘したことがある。それにもかかわらず、世界的規模で考えると、現在でも Kachru のいう Inner Circle の国々に留学や移住をして、学問や就労を成り立たせるために英語学習を行なっている L2 話者が圧倒的に多いのではないか。而して、真摯にして熱心な心的態度で英語学習に取り組む良質の L2 話者が存在することは経験的事実であり、彼らにとってこそ適切な英語音の習得は切実なものであるといえる。このような環境において、nonnative speaker の L2 話者が関与する重要な相手は、逆説的にも L1 native speaker であることは想像に難くない。Inner Circle の国々において、nonnative speaker 同士が英語でいくら意思疎通できたところで、肝心の留学や就労を完結することはできまい。その意味では、L1 native speaker にも EIL の視点をもって、自負心から派生する権威主義には一定の是正を施してもらいたい——LFC を L1 話者にも共通知識として理解してもらいたい——とするのは L2 話者側の主張ではあ

ろうが、話者人口数だけで標準発音モデルを決定する権利を獲得するというのは、人工言語の創造でない限り、現実的ではなく、むしろ受け入れられないのではあるまいか。これが中国や日本といった **Expanding Circle** の国々での英語習得への提言であるとしても、そこでは **nonnative speaker** 同士の日常的会話など存在しない現状が横たわっているから、果たして、**Jenkins** が主張するほどに有意義なものになるかどうかについては疑念が残る。とはいえ、武道や芸道の根本支柱たる「守・破・離」の精神に鑑みると、**L2** 話者が“判読可能性”を備えた“我流”を編み出してもよい時期（「離」の時期）に至っていることを英語教員に示唆する **brainstorming** の要素に満ちた主張であることは強調しておかねばならない。

結びにかえて——英語らしさの追求

数多ある英語に対する批判を乗り越えて、英語という言葉が国際共通語の地位を占めたということは厳然たる事実であろう。こうした時代に、「平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ」(we desire to occupy an honoured place in an international society striving for the preservation of peace, and the banishment of tyranny and slavery, oppression and intolerance for all time from the earth) と日本国憲法「前文」に謳う日本人にとっての英語習得、特に、発音面の習得について、本稿では考察を進めてきた。英語習得の基礎的段階にある中等教育における指針である学習指導要領の中で指摘される“現代の標準的発音”がいったい何を意味するのかを考究した。**Jenkins** のような進歩的な考えが存在する一方で、“現代の標準的発音”について一定の見解を述べるとすれば、日本人にとっての標準は、歴史的経緯も考慮すると、現段階では、“修正 **RP**”ならぬ“修正 **GA**”ということに落ち着くのではないかと思う。ただし、この場合の「修正」とは、学習者の地域発音（日本人の場合には日本語的音節構造、音節リズム、強勢のメリハリのないアクセント等）を組み入れたものを意味していない。むしろそれは、英語の二大優勢変種である **Br.E** と **Am.E** のどちらかに偏ることを避け、**Windzor Lewis** の発音辞典のような方式を採用ということである。また、**島岡**（1994）が提案す

るように、必要に応じて、IPA 表記に代わって、カタカナ表記を改良して使用することも方途の一つである。

最後に、本稿筆者が EGL や ELF の視点を踏まえて、どうしても日本人学習者に必要だと考える「英語らしさ」追求のための必須事項を 3 点に絞って指摘して、本稿を結びたい。

(1) 英語らしさ (その 1) —— 語頭子音 / p // t // k / (fortis plosive) の習得 (eg. Be sure to practice all the time./ The king and queen were greeted by the crowds of people in the kindergarten. / Who were you talking to on the telephone?) 学習者の L1 (日本語) にもバ行音、タ行音、カ行音が存在するため、安易に L1 音素で代用しがちだが、それがかえって、著しく異なる当該英語音素の習得を妨げると同時に、学習者自身が問題点に気づかない傾向を助長する。

(2) 英語らしさ (その 2) —— 音節構造の違い (閉音節 vs. 開音節) の理解と、子音連結 (consonant cluster) の習得 (eg. 日本語語彙に浸透した外来語の影響を排除する : cream / crystal / street / trouble / drama / straight / risk 等。語頭子音連結 /tr-/ true trick train; /kr-/ credit cream crack; /br-/ brown breath bright; /dr-/ drill draw drop; /spr-/ spring spread spray; /str-/ strike strong stream 等。語中子音連結 /-ktʃ-/ lecture picture structure; /-ntr-/ introduce central country 等。語末子音連結 /-pl/ people apple couple; /-bl/ double cable Bible; /-kl/ circle bicycle uncle; /-gl/ single eagle struggle; /-tl/ little bottle battle; /-dl/ middle handle saddle; /-ps/ tips caps ships; /-bz/ jobs cabs rubs 等。

(3) 英語らしさ (その 3) —— 強勢リズム (stressed-timed rhythm) と等時性 (isochronism) の理解と習得 (eg. There is a |GIRL who is |READING a |BOOK under the |TREE.// I |PLAN to |VISIT a |TOWN in |CANada.// |WHAT I |WANT is a |PIECE of |adVICE.// You may |SWIM in the |POOL in the |EVENing.// I |WONder if I might take a |LOOK at your |TEXTbook. 等。

上掲 (3) の超分節音素は、ELF としては重要視されないが、“修正 GA”を標準的モデル発音として設定する場合には必要な言語知識と言語運用であると考えられる²³⁾。この場合の音声指導は、従来のように、聴覚のみに拠る強勢リズム感覚の涵養に努めることも一方法であり、上級学習者にはそれで音声イメージが脳内に形成できると思われる。他方、最近では、

CALL 音声認識ソフトにあるように、音声波形にピッチ曲線を重ねた視覚情報を補助的に活用することにより、初級・中級学習者にとっては、より効果的な学習が期待される²⁴⁾。

Crystal (2004) が近づきつつあると期待を寄せる International Standard Spoken English “国際標準口語英語” は現実社会にまだ実体を見せてはいないし、その足音を感じ取れるかどうかにも個人差がある。また、Jenkins (2000) の提唱する ELF “国際共通語としての英語” なるものが、*The Lord of the Rings* に登場する Elvish Language ——それはあくまでもトールキン (John R. Tolkien) の描く架空世界において Elf 族が話す言語——のようだと揶揄するつもりは断じてないが²⁵⁾、現実世界における現代版 Elvish の創造と獲得がそれほど容易なことではないことは多言を要さない。

註

- 1) *Jack and Betty* の産みの親、稲村松雄によれば、「*Jack and Betty* の執筆に当たっては、この指導要領 (試案) [1947年] の精神を念頭に置いていた。この指導要領 (試案) の英語科についての記述はパーマーの理論に基づいていることは歴然としている。その点でも *Jack and Betty* とこの指導要領との関係は密接である」と述懐し、当該指導要領の4目標、すなわち、「①英語で考える習慣を作ること、②英語で考えることを学ぶ手段としてまず英語を聴くこと、話すことを学ばなければならない。これは第一の技能 (primary skill) である、③次に第二の技能 (secondary skill) として読み方、書き方を学ぶ、④英語を話す国民について知ること。特にその風俗習慣および日常生活について知ること」のうち、「この第4項目について *Jack and Betty* は全3巻を通してアメリカ合衆国国民の風習、日常生活に徹して、他の要素はほとんど入れなかった」ことを明らかにしている [稲村 1993: 62-63]。
- 2) それに続いて、「ただし、様々な英語が国際的に広くコミュニケーションの手段として使われている実態にも配慮するものとする」と附言されていることは、現在英語が置かれた状況を視野に含めたものとして一応評価には値するが、「実態にも配慮する」という表現から、どの程度まで何に配慮するのかの具体的なイメージを容易に形成することはできない。
- 3) 同書の改訂版ともいうべき Crystal (2003²⁾) では、アラブ首長国連邦に住むドイツ出身の技師の父とマレーシア出身の母をもち、この夫妻の共通言語である英語で育った子供の場合に、“母語” と “外国語としての英語” の境

界は極めて曖昧なものになるという事情も追記された。

- 4) 『地球語としての英語』(みすず書房, 1999)「訳者解説」(pp. 195-215) 参照。
- 5) この場合の“交流言語”とは、例えば、ドイツ語の分からない日本人と日本語を知らないドイツ人がパリの国際市場で出会った場合に“相互の意思伝達のために選択される言語”を意味しており、現状では「英語」が選択される可能性が最も高いといえる [鈴木2000: 158-162]。
- 6) 日本の大学の中に WE を英語名として戴く学部 (国際英語学部を College of World Englishes と表記) まで登場するような時代になったことは注目すべき事態であろう。
- 7) ここで言及した VOA をはじめとする海外英語ニュース音源は今ではインターネット上で視聴することができる。例えば次のような URL を参照されたい。
 - ① VOA (<http://www.voanews.com/english/news/>)
 - ② VOA (<http://www.voanews.com/learningenglish/home/>)
 - ③ ABC (<http://www.abcnews.go.com/>)
 - ④ BBC (<http://news.bbc.co.uk/>)
 - ⑤ CBS (<http://www.cbsnews.com/>)
 - ⑥ CNN (<http://www.cnn.com/>)
 - ⑦ ABC (<http://www.abc.net.au/>) [Australia]
- 8) Communicative Ability といえ、かつては口頭伝達 (話しことば) に特化して考えられてきたが、インターネットの普及により、書きことばを手段とする即時反応型の外国語運用能力も求められるようになった。小林薫曰く、「口頭英語ばかりか書く英語が interactive で、real time で、on-line でならなければならないことが影響しています。問題は、書かれたものであれ口頭であれ、英語で express する面と response する面との間に、日本ではギャップがあったことです」[英検 Step News 375号(1997): 21]。
- 9) かつては、英米語を“絶対的標準型”と見なして、そのそれぞれに合致した『発音辞典』が編まれた。Daniel Jones - Gimson - Wells の系譜に連なる RP 系の英語発音辞典が存在する一方で、Kenyon & Knot に代表される GA 系の米語発音辞典が存在するが、その中にあって、J. W. Lewis 編著 *A Concise Pronouncing Dictionary of British and American English* (1972) は EFL 学習者志向性が強く意識され、「英米語を問わず、英語を学習する外国人に推奨すべき発音を 1 語につき 1 つ示すことを原則に定めた」進取の英米語発音辞典であった。なお、GA に相対するものとして GB (General British) という名称を提示したのはこの著者 Lewis である。最近の発音辞典としては、J. C. Wells (1990/2008³) *Longman Pronunciation*

- Dictionary*; P. Roach and J. Hartman (1997) *English Pronouncing Dictionary*, Daniel Jones 15th edition (Cambridge U. P.); C. Upton, W. Kretzschmar, Jr. and R. Konopka (2001) *The Oxford Dictionary of Pronunciation for Current English* をあげることができる。
- 10) ウェールズ出身の Crystal は自身の英語習得を三段階に分けて述懐し、氏の言語的洞察力をよく表わしている——(1) 家庭語としての Welsh 及び Welsh English であり、10歳から転居した土地リヴァプール訛 Scouse が習得の第一段階；(2) 学校教育で習得する British Standard English が第二段階であり、標準の変種の文法と語彙を獲得して、書き言葉から話し言葉へと適用拡張；(3) 海外で仕事をする機会も増え、それぞれの地域の人とコミュニケーションすることの必要性が Br.E にも Am.E にも固執しない International Standard English の習得を生んだ第三段階 [Crystal 2004: 38–39]。
- 11) Webster の言辭に関しては David Crystal (2003²) pp. 177–178 参照。Adams の言辭に関しては同書 p. 74 参照。
- 12) George Bernard Shaw (1856–1950) は英語学者 Henry Sweet や Daniel Jones とも親交があり、英語の発音と綴りの乖離問題については、次のような事例をあげて、その首尾一貫性の欠落を揶揄する。すなわち、ghoti と綴って [fiʃ] (fish) と読むことができるくらい spelling caos があるということ——enough や laugh の [f]、women の [i]、nation や station の [j] ということだが、実際には音環境により（例えば、語頭の gh は ghost のように [g] にしかならない等）、この綴りを fish のように発音することは無理であることは Shaw も重々承知していたと思われる。なお、英語の綴り字問題については、山口（2009）と大森（2010）を参照のこと。
- 13) Susan Ramsaran, “RP: fact and fiction,” *Studies in the Pronunciation of English: a commemorative volume in honour of A. C. Gimson*, 1990, pp. 178–190 参照。
- 14) There is an aspect of intonation that has often been quoted in relation to age differences: this is the use of rising intonation in making statements, a style of speaking that is sometimes called “upspeak” or “uptalk” [Roach 2009: 165]. 例えば、I was in Marks and Spencer’s. In the food section. They had this chocolate cake. I just had to buy some. を upspeak/uptalk で発話すると次のようになる——I was in ¹Marks and ~~/~~Spencers | In the /food section | They had this ~~/~~chocolate cake | I just ¹had to \ buy some (with a falling tone only on the last tone-unit) [Roach 2009: 166]。
- 15) ただし、John C. Wells（ロンドン大学名誉教授）は立場が異なり、今や、

- かつての Cockney は聞かれず、様々な言語的背景をもつ移民の三世・四世が native speaker として英語の変種を話している事実を認識すべきであるとは主張するが、いわゆる「河口域英語」「Estuary English」なる変種は架空のものであって、一変種として認定することは適当ではないと論断する [International Symposium: Phonetics & English Language Education (関西外国語大学国際文化研究所主催, 2011.11.8) における講演 “From Cockney to Multicultural London English” から]。
- 16) Netspeak 出現の結果、それを利用する言語内部に言語形式の変化が生じている。例えば、rebus techniques (B4 = before / CU18er = see you later)、initialisms (afaik = as far as I know / imfo = in my humble opinion)、respelling (thx = thanks) 等が使われる。これに加えて、書記体系に変化が生じている—— capitalisation 規則の不遵守、punctuation の縮小化・欠落、spelling における米国式綴りの浸透、spelling errors に対する寛容性 [= 教養度の問題ではなく、単なるタイプミスとして見なされる] 等は、むしろ on-line 言語の表現幅を拡張していると解釈でき、新しい慣習法の導入として理解される。インターネットのような新しいテクノロジーに新しい言語的慣習は不可避である。詳しくは、Crystal (2004: 80-86) 参照のこと。
- 17) もっとも、田辺 (2003: 170-174) の主張では、教養ある話し言葉というものは、必ずしも音声面を強調したものではなく、characterized by or displaying qualities of culture and learning という定義に準じた、意識的かつ後天的に獲得した品位といったもので、昔から英語学徒に警句とされた「how to speak に先んじて what to speak of がある」といった思想に通ずる。
- 18) 本節における Jenkins (2000) の紹介については、大森 (2007) に加筆修正を施したものであり、記述に重複する箇所がある。
- 19) この RP の不断の変化についての観察は、Michael Ashby の指摘とも合致するが、Ashby のほうは、英語の L2/FL 学習者が習得する RP が時代遅れのものである可能性については重要視しないところに、立場の違いが看取される。
- 20) 米国の言語研究ジャーナリスト H. L. Mencken がかつて「イギリス英語とアメリカ英語は異なる道を辿る別々の言語であり、アメリカ英語は将来イギリス英語から独立した一言語になるであろう」(1919) と記述したこと、また、それより以前に、H. Sweet が「一世紀も経てば、英国と米国と豪州は相互に理解不可能な異なる複数の言語を話すことになる——その理由は、発音の変化がそれぞれに異なっていることに起因する」(1877) と指摘し、さらに遡れば、N. Webster もまた同様の点を強調して、「イギリスの英語とは異なる北アメリカ語の誕生」(1789) を予見したことは本稿第 3 節で記述したとおりである。

- 21) Jenkins (2000) では、Kachru の提示する英語話者類型の3分類は採用せず、ここでの L2 という terminology は L1 に対峙する概念を表わす総体としての術語であり、Kachru の L3 (Expanding Circle) を包摂するものであることに留意されたい。
- 22) この主張は傾聴に値するものの、現段階では一概に支持することはできず、実際の音声指導において、リズムやストレスの習得がかなりの程度重視されていることも事実である。例えば、Jane Setter (レディング大学准教授) は Jenkins の LFC に多大の関心を払いながらも、リズムやストレスを音声指導必須項目から落とすことはなく、分節音素と同様に重要であると主張する。[*International Symposium: Phonetics & English Language Education* (関西外国語大学国際文化研究所主催, 2011.11.8) における講演 “Teaching Pronunciation” から]。
- 23) この趣の機械的な強勢リズムの附与からさらに一步進んで、中・上級学習者には、M. Ashby が音声指導に組み込むような「情報構造に着目した、旧情報の強勢の脱落と新情報への強勢の附与」という談話構造に立脚した視点とそのトレーニングも第(3)項に関連する新たな課題である。例えば、次の対話文の場合の強勢附与を考えてみるとよい。Eg. 1: (A) I'm HUNgry. (B) You're ALways hungry.// Eg. 2: (A) Do you like RAW TUna? (B1) I've never TRIED raw tuna./ (B2) I like ANY kind of fish.// Eg. 3: (A) Do you like my NEW GLASSES? (B1) I didn't notice you'd GOT new glasses./ (B2) Well they suit you better than the OLD pair.
- 24) この方法による英語音声イメージの獲得については、大森裕實が代表者となって2006年度及び2007年度に愛知県立大学教育研究活性化推進研究費を受給した「視覚認知型英語音声聴覚イメージを利用した効果的学習モデルの研究開発」がある。また、同代表者により、2011年度から3年計画で文科省科学研究費(基盤研究C)を受給した「コンピュータ利用の視覚認知型英語音声聴覚イメージの獲得に関する研究」(課題番号23520686)があり、本稿は当該研究の基礎となる概念を整理する意味において、密接な関連性をもつ。
- 25) Elvish の産みの親 John Ronald Ruel Tolkien (1892-1973) は最近では *The Lord of the Rings* 三部作の映画化で、世間にその名前が知られるようになったが、原語綴りでは、現職英語教員にすら正確には発音されない場合も少なくない。なぜ Tolkien が、Elvish のような綿密な言語世界を構築するのかといえば、氏が正真正銘の英語学者 (philologist) だからである。第二次世界大戦を跨いで、Oxford 大学で長く教授職にあったが (1925-59)、ME の語彙研究や Beowulf 研究に優れたものを残した。例えば、現在でも好んで使われる ME のテキストの一つに K. Sisam (ed.), *Fourteenth Cen-*

tury Verse & Prose (Oxford U. P.)があるが、その巻末に付けられた大部の Glossary: “A Middle English Vocabulary” は氏が1922年に完成した“小型 ME 辞典”をそっくり転載したものである。古稀記念論文集 *English & Medieval Studies* (1962) や追悼記念論文集 *J. R. R. Tolkien, Scholar and Storyteller* (1979) も上梓されている。最近のものとしては、J. Chance (ed.) (2003) *Tolkien the Medievalist* (Routledge) があって、Tolkien の多彩な側面を15名の学者が論じている。欧米の大学では、功なり名を遂げた人の名前を戴く“冠教授職”というものが格式が高いようだが、Tolkien も例外ではなく、1980年にOxford大学に“J. R. R. Tolkien Professorship of English Literature and Language”が創設された。

参考文献

- Bauer, L. (2002) *An Introduction to International Varieties of English*. Edinburgh U. P.
- Baugh, A. and Cable, T. (2002⁵) *A History of the English Language*. London: Routledge.
- Bryson, B. (1990) *Mother Tongue: the English Language*. London: Penguin Books.
- Cruttenden, A. (2008⁷) *Gimson's Pronunciation of English*. London: Hodder Education.
- Crystal, D. (1988) *The English Language*. London: Penguin Books.
- Crystal, D. (1997/2003²) *English as a Global Language*. Cambridge: Cambridge U. P.
- Crystal, D. (2004) *The Language Revolution*. Cambridge: Polity Press.
- 日野信行 (2008) 「国際英語」『スペシャリストによる英語教育の理論と応用』(小寺茂明・吉田晴世 編著), 15-32. 東京: 松柏社.
- Hughes, A., Trudgill, P. and Watt, D. (2005⁵) *English Accents and Dialects*. London: Hodder Arnold.
- 稲村松雄 (1986) 『教科書中心 昭和英語教育史』東京: 開隆堂.
- 稲村松雄 (1993) 『ジャック・アンド・ベティから21世紀へ』東京: 桐原書店.
- International Phonetic Association. (ed.) (1999) *Handbook of the International Phonetic Association*. Cambridge: Cambridge U. P. [竹林滋・神山孝夫 (訳) (2003) 『国際音声記号ガイドブック』東京: 大修館書店.]
- Jenkins, J. (2000) *The Phonology of English as an International Language*. Oxford: Oxford U. P.
- Jenkins, J. (2007) *English as a Lingua Franca: Attitude and Identity*.

- Oxford: Oxford U. P.
- Kachru, B. (1985) Standards, Codification and Sociolinguistic Realism: the English Language in the Outer Circle, *English in the World*, eds., R. Quirk and H. G. Widdowson, Cambridge U. P., 11–30.
- 兼弘正雄 (1975) 『改訂 英語音声学』 京都: 山口書店.
- McCrum, R. et al. (1987) *The Story of English*. London: Penguin Books.
- 大森裕實 (2002) 「British English の最近の発音変化に関する一考察—Received Pronunciation と Estuary English—」 『愛知県立大学 外国語学部紀要 (言語・文学編)』 34号, 25–35.
- 大森裕實 (2005) 「書評 David Crystal (2004) *The Language Revolution*」 『JACET 中部支部紀要』 第3号, 69–77.
- 大森裕實 (2007) 「書評 Jennifer Jenkins (2000) *The Phonology of English as an International Language*」 『JACET 中部支部紀要』 第5号, 57–63.
- 大森裕實 (2008) 「視覚認知型英語音声聴覚イメージの効果」 『言語研究と英語教育』 (中部応用言語学研究会) 8号, 27–43.
- 大森裕實 (2010) 「英語の綴り字改革に関する展望—Sweet/Murray/Crystal による言語学的視点—」 『愛知県立大学 外国語学部紀要 (言語・文学編)』 42号, 21–40.
- 小篠敏明・江利川春雄 (2004) 『英語教科書の歴史的研究』 東京: 辞游社.
- Ramsaran, S. (ed.) (1990) *Studies in the Pronunciation of English*. London: Routledge.
- Roach, P. (2009⁴) *English Phonetics and Phonology*. Cambridge: Cambridge U. P.
- 島岡 丘 (1994) 『中間言語の音声学』 東京: 小学館プロダクション.
- 清水克正 (1995) 『英語音声学——理論と学習』 東京: 勁草書房.
- Svartvik, J. and Leech, G. (2006) *English: One Tongue, Many Voices*. Hampshire: Palgrave Macmillan.
- Sweet, H. (1877) *A Handbook of Phonetics*. Oxford: Clarendon Press. [Rept. 木原研三 (編) (1998) 『音声学提要』 東京: 三省堂.]
- 竹林 滋 (1996) 『英語音声学』 東京: 研究社.
- 田辺洋二 (2003) 『これからの学校英語——現代の標準的な英語・現代の標準的な発音』 東京: 早稲田大学出版部.
- 鳥居次好・兼子尚道 (1962) 『英語の発音——研究と指導』 東京: 大修館書店.
- 鳥居次好・兼子尚道 (1969) 『英語発音の指導』 東京: 大修館書店.
- 山口美知代 (2009) 『英語の改良を夢みたイギリス人たち』 東京: 開拓社.